

# 女子ハンドボール競技における左利き右バックコートプレーヤーのシュートプレー

## －世界トップレベルと日本の学生選手の特徴－

中村 歩夢 （ 筑波大学 ）

### 1. 目的

本研究の目的は、女子ハンドボール競技における世界トップレベルの左利き右バック（以下、世界トップ）のミドル・ロングシュートプレーおよびカットインシュートプレーの特徴を明らかにすることである。また、本研究（以下、中村）も分析対象とし、自身のシュートプレーの改善点を検討することによって、今後の競技人生に活かすことを目的とする。

### 2. 研究方法

- 1) 対象者：世界トップは、VYAKHIREVA、MØRK、RYU、日本の学生選手は、中村とした。
- 2) 分析対象：対象者が出場した公式戦全 54 試合。
- 3) 分析方法：シュートプレーに関するプレー要素を、ボール保持前の助走、ボール保持の瞬間、ボール保持中の助走、シュートの 4 つに分類し、それぞれの要素において分析項目を作成した。Fisher の正確確率法を用いて比率の差を検定し、有意差が認められた場合には、Ryan の方法により多重比較を行った。

### 3. 結果と考察

#### 1) VYAKHIREVA のシュートプレーの特徴

助走なしのプレーや防御者と正面で対峙するプレーが多かった。シュート局面では、さまざまなシュートタイミング、シュートステップ、フェイントを用いていたことから、個人で 1 対 1 の状況を作り出していると考えられる。

#### 2) MØRK のシュートプレーの特徴

ゴール方向への助走が多くゴールに対して非利き腕側を向ける体勢でプレーしていることが多かった。ミドル・ロングシュートでは、シュー

トコースに有意な差はなかったことから、対峙するキーパーと駆け引きをしていると考えられる。

#### 3) RYU のシュートプレーの特徴

防御者がチェンジをする状況でミドル・ロングシュートに至っていることが多かった。シュート局面では、ジャンプシュートフェイクで突破するなどの駆け引きをすることによって、より効果的なシュートプレーになっていると考えられる。

#### 4) 中村のシュートプレーの特徴

全てのシュートプレーにおいて、フェイントを用いていないことが多かった。ミドル・ロングシュートでは、限られたステップパターンとスイング動作を使用していた。これらのことから、シュート局面では様々なバリエーションでシュートを打てるようになることが求められる。

### 4. 結論

世界トップは、それぞれが自己の形態や個性を活かしながら目の前の状況に応じたシュートプレーを実践していた。一方、中村は、シュート時の工夫が少なく、シュートバリエーションが限られていた。今後中村がプレーする競技レベルでは、防御者とゴールキーパーの連携がさらに強くなることが予想されるため、シュートタイミングに変化をつけることによって防御者を惑わせ、ゴールキーパーとの連携を崩すことが必要になる。

### 5. 主な参考文献

山田永子・ネメシュローランド・藤本元（2013）女子ハンドボール競技におけるバックコートプレーヤーのシュートプレー：世界トップレベルと日本選手の比較検討. ハンドボールリサーチ, 2 : 21-29.